身じまい自習室 16

「お任せデス」の再考を

樋口恵子さんの実践

毎日新聞東京本社で5日に開かれたNPO法人「りすシステム」（千代田区）のシンポジウム「生き方・死に方を考える」は、立ち見も出るほどの盛会だった。人生最終盤の医療についてがテーマだったから、関心が高かったのだろう。

「りす」は、死の迎え方を自分で決めたい人をサポートしてきた。いわゆる「生前契約」を進めてきたのだが、1993年のサービス開始当初、そんな団体は見当たらなかった。ひとり暮らし世帯の急増につれ「生前契約」という言葉は認知されてきたが、事前に準備しておくことは、想像以上に多岐にわたることが分かってきた。

そこで、25周年記念のシンポジウムは、中でもいちばん自分の意思を通すことが難しい「医療」をテーマにしたという。

例えば、墓や葬儀のことは、おカネさえかければ何とかなる。費用をかけないやり方もある。だけど、こと医療に関しては、思い通りにならないことが山積しているのだ。

自宅でもしひとりで倒れたとき、延命措置をするかしないかは誰が判断するのか。事前に決めていても、駆けつけた救急隊員に伝わるのか。家族には自分の意思は伝えているのか。シンポジウムでは、救急救命の専門家が厳しい現状を報告した。また「尊厳死」という言葉の浸透度や、医療現場で起きていることに法律は対応できているのかなど。登壇者はそれぞれ、データを示して説明した。

トークで会場をわかせ、考えさせる樋口恵子さん＝毎日新聞東京本社で11月5日

2時間半の議論で問題点が整理できたと思う。いちばん印象に残ったのは、唯一の女性パネリスト、評論家の樋口恵子さん（86）の『おまかせデス（死）』ではいけません」という言葉だった。配布された資料には「『お任せデス』から『自分のデス』へ」とあった。

高齢者には医者に任せきりの人は多いが、「自分はこうしてほしい」と考え、周囲に伝えておかなくては、ということだろう。

樋口さんには名言がたくさんある。例えば「ファミレス社会」。単身世帯が増えて「ファミリー（家族）がレス（少ない）」となっていく社会の変容を言い当てた。また、人生100年といわれるいまは、60代の子が親より先に死ぬこともありうる「大・逆縁時代」なのだ、と。

会場で樋口さんは、自らの実践を披露した。何かあるとまずはじめに必ず探される保険証に、肉筆で〈一切の延命治療はご辞退申し上げます〉と書いた名刺を入れているという。〈娘も了承してます〉と書き添え、押印までして。時々更新して、現在3枚目だという。イヤなことを考えておく。そのトレーニングが必要なのだろう。そうして樋口さんは最後にこう訴えた。

「家族が少なくなった分、血縁がなくても支え合えばいい。あんまり悲観することはやめましょうよ！」

【滝野隆浩・58歳】

＝次回は12月7日掲載